

演題番号

男性勤労者の野菜摂取行動に関する意思決定バランスと変容ステージとの関連の検討

事務局記入)

○串田 ^{くしだ} 修 (新潟医療福祉大学) , 村山 ^{むらやま} 伸子 (新潟医療福祉大学)

【背景】 トランスセオレティカルモデルの構成概念の 1 つである意思決定バランスは行動変容に強く関わっているとされる。本研究では、野菜摂取行動に関する意思決定バランス尺度を作成し、変容ステージとの関連等によりその信頼性・妥当性を検討した。

【方法】 新潟市内の 20 の企業施設に属する 20 ～59 歳の成人男性勤労者を対象に、2009 年 9 月に自記式質問紙調査を実施した。行動変容ステージは「1 日に野菜を 5 皿以上食べることを目標行動として、実施度と行動変容の準備性の 2 段階で構成した評価法を用いた。意思決定バランスは海外の既存尺度から項目選定し、「野菜をたくさん食べることに」に関する pros(恩恵)と cons(負担)各 2 項目について、重要度をたずねる 4 項目の尺度としてまとめた。また、意思決定バランスと並びトランスセオレティカルモデルの構成概念である、変容プロセス(認知的プロセス 5 項目、行動的プロセス 5 項目)及び自己効力感(3 項目)を把握した。信頼性の評価は、Cronbach のアルファを用い検討した。妥当性の評価では、意思決定バランス、変容プロセス、自己効力感の各尺度の項目の因子負荷量により構成概念妥当性を、尺度の得点と行動変容ステージとの間の関連性により基準関連妥当性を検討した。

【結果】回答が得られた 600 名のうち、527 名(平均 41.1 歳)を解析対象とした。作成した意思決定バランス尺度の Cronbach のアルファは pros が 0.760, cons が 0.739 と各々一定の信頼性が確認された。因子分析では、安定した下位因子の構造が確認され、意思決定バランスの pros と cons,

変容プロセス、自己効力感の各構成概念がそれぞれ異なる因子に分類された。行動変容ステージとの関連について、意思決定バランス尺度の pros 及び cons の得点はともにステージ間で有意な差がみられた(図 1)。多重比較の結果、pros の得点は、前熟考期に比し準備期で有意な高値を示した ($p < 0.05$)。一方、cons では、前熟考期に比し準備期及び実行期 + 維持期で有意な低値を示し ($p < 0.05$)、実行期 + 維持期は熟考期に対し有意に得点が低かった ($p < 0.05$)。

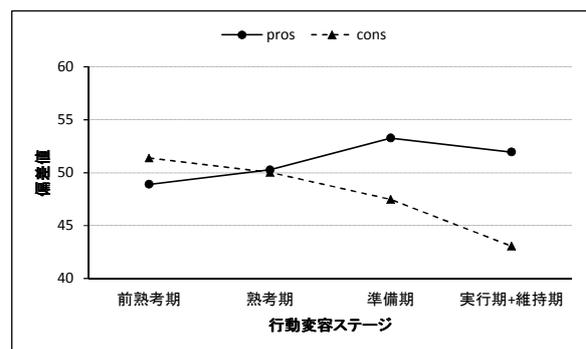


図 1 意思決定バランス尺度の得点と行動変容ステージとの関連(n=527)

【考察】 本研究で用いた意思決定バランス尺度は、内的整合性及び他のトランスセオレティカルモデル構成概念との関連が認められ、その関連の強さは海外の先行研究と同程度であった。また、行動変容ステージとの関連にも類似がみられた。

【結論】 作成した意思決定バランス尺度は尺度の内的整合性ととも構成概念妥当性及び基準関連妥当性も確認されたことから、一定の信頼性・妥当性を有すると考えられる。

E-mail ; kushida@nuhw.ac.jp